
素晴らしきかな人生

馬河童

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

素晴らしきかな人生

【Nコード】

N3997E

【作者名】

馬河童

【あらすじ】

ある青年の1999年の出来事（つてその頃に書いたんですが）。とある出来事から彼は人生の真理を悟る？？あまり書くとネタバレになるのであとは本文でお願いします。昔書いた小説の中では最もな方だと思っています。

はじめに

はじめに

やあ、皆様こんにちは。ご機嫌は如何ですか？私は上々です。「Fine thank you」ってな感じです。

さて、もしよろしければ、これから皆様にちよっぴり奇妙でいい話をお聞かせしたいと思います。興味のある方はどうぞこれより先へお進み下さい。ない方は残念ですがここでお別れになります。ただし、一つだけ申しておきたいことがあります。それは『これから私の話を聞けば、きっと今までこの世界において疑問だった幾つかの事象の答えが見えてくるであろう』ということです。本当は私などが話してはいけない事なのですが、出血大サービスです。命を掛けて皆様にお話したいと思います。どうです？興味が出てきましたか？

「ところでお前は誰か」って？そうですね、その疑問はごもつともです。名乗る程の者ではございませんが、一応自己紹介しましょうか。私は栗田由紀夫という者で、作家をしております。まあこれからの話には私の名前なんてほとんどどうでもいいのですが、頭の片隅にでも覚えていて下さると嬉しいですね。これからよろしくお願いします。

まあ私はあくまで『語り部』としての役割を果たさせていただきます。いろいろとお見苦しい点、いやお聞き苦しい点もございましょうが、一生懸命努めさせてもらう所存でございます。

それでは皆様、準備はよろしいでしょうか？誠に大げさではありますが、奇妙奇天烈奇怪不思議驚異驚嘆感動の世界にお招き致しますよ。それではいつてらっしゃーい！

あ、ちよっと待って下さい！一つお断わりしておくのを忘れていました。勝手ではありますが、本文に入ってから『ですます調』

は辞めさせていただきます。なにしろ『ですます調』は疲れますの
でね。言葉の丁寧さに気を使うよりも、話の内容を語ることにエネ
ルギーを費やしたく思います。ご了承下さい。
では、はじまりはじまり。

第1話

1999年、結局7月にも9月にも何も起こらなかった。とはいえ、ノストラダムスの大予言に子供の頃から怯えていた、もしくは何らかの関心を示していた人は少なからずいたのではないだろうか。R教大学史学科に在学する岡安洋もそんな一人だった。彼は授業を終えて友人と初秋の大学構内を歩いている最中、その話題で熱くなっていた。

「なあ岡安、やっぱり何にも起こらなかったじゃないか」

同じゼミの同級生、豊田がそう言うと、洋は首を振った。

「それは違うね。当たったかどうかはノストラダムスのみが知るところなのさ。7月にフランスで天文学者達を乗せたロープウェイが落下事故を起こしただろう？ノストラダムスはフランス人だから、それが『恐怖の大王』だったかもしれないんだ」

「お前そんなのこじつけどよ。それじゃ『5月のユーゴの内紛がそうだった』って後から言ってる何とかっていう評論家と一緒にじゃないか」

「ぐむむっ……」

洋は豊田のもつともな意見に口をつぐんだ。確かに彼の指摘は的を獲ていた。洋としては評論家が文句を言われまくるのは一向に構わない。予言で金儲けしようとする適当な事をほざいている奴も多々いるからだ。

でもノストラダムス本人が批判されるのは納得いかなかった。洋の中では、表面上何も起こらなくても彼は偉大な預言者のままだった。今日まで、人々に影響を与える言葉を残しているだけで素晴らしいではないか。1999年に何が起ころうが起ころまいが、過去の世界から人を右往左往させていることに凄さを感じるのだ。豊田の言うことはわかるが、納得したくないのもまた事実だった。結局、この日はこの話をしている最中に池袋駅に着いてしまい、洋は電車

で、豊田は歩きでそれぞれの家路に帰宅した。

電車に乗った洋がカバンから取り出したのは『UFO 宇宙人は存在する』という本。洋の興味はノストラダムスにとどまらない。いわゆるオカルトや超常現象などと呼ばれる事象には全て関心を持っていた。そんな中、今年は夏に掛けてニユース番組までノストラダムスを取り上げて騒ぐ始末で、洋の入っている文化人類学の梅川ゼミでも常にそのことが話題に上っていたのだ。それで最も仲の良い豊田とはいつもそんな話をしているのだった。

一人暮らしの城に帰宅すると、洋は真っ先に寝転がった。彼の部屋は簡素にして、本棚と小さなテーブル、そしてTVが置いてあるだけで、六畳のスペースが広々と使われていた。寝転がってもまだ五人は十分に眠れる広さがある。ゼミの発表をまとめる為、連日徹夜していた彼は疲れていた。時刻はまだ七時半だが、今からでも十分に寝ることが出来そうだった。ただその前にやることがある。

今日は金曜日。洋は土曜日に授業が入っていないので明日から連休である。いつしか彼の手は床に置かれた電話に伸びていた。コードレス受話器を手に取り、番号をプッシュして相手が出るのを待つ。

「もしもし？」

相手から応答があつた。女性の声だ。

「あ、岡安だけど…」

「洋君！待ってたのよ、電話」

声の主は洋の彼女、乙山美枝子であつた。

「へへへ。嬉しいな。それより明日はどう？会えないかな？」

「大丈夫、空いてるわよ」

「そうか、良かった。今日ゼミに来なかったんで、明日も会えないかと思ったよ」

「今日はお父さんの法事だつて言つたじゃない」

美枝子の父は彼女が小学生の頃に亡くなっていた。

「あ、そうか。そうだったね」

「もう！すぐ忘れるんだから…。どうせまた超常現象のことでも、

夢中になつて考えていたんでしょ？」

「ははは」

図星を突かれて洋は苦笑した。美枝子の言う通り、彼女がゼミに來ない理由などすっかり忘れていたのだ。

「まあいいわ。じゃあ明日はどうする？」

「そうだなあ……」

「映画はどう？私、『マトリックス』が見たいな！」

美枝子は即断即決、意見を出す。

「OK！じゃあ俺が家まで迎えに行くよ。十時頃でいいかな？」

「いいわよ。出掛ける用意して待つてゐるわね」

「じゃあまた明日！」

「うん。おやすみなさい……」

受話器の向こう側で通話が遮断される音が響いた。洋はコードレスホンを本体に戻すと、再び寝転がる。そしてあまりの眠さから、夕飯も食べずにそのまま眠りに就いてしまった。

眩しさに目が痛い。日の光が部屋に差し込んでおり、その直撃を受けて洋は目を覚ました。時計を見る。もう八時半過ぎだった。昨日、美枝子に電話した後、そのままずっと眠ってしまったのだ。腹が鳴っている。夕飯も食べていないので無理もない。洋は飛び起きると、餌を探す恐竜のように荒々しく冷蔵庫を開けて食品を物色した。

だが、すぐに食べられそうなものは見当らない。仕様がなないので牛乳だけ飲み干した。まだまだ空腹は治まらないがどうしようもない。美枝子と何か食べることに決め、洋はシャワーを浴びた。出掛ける準備を全て済ませた時にはもう九時半だった。

洋の下宿と美枝子の家は極めて近い距離にあった。歩いて八分程の近さ、その上最寄りの駅も同じで、それが付き合い始めるきっかけになった。よく帰りが一緒になるのは大きかった。帰宅時に話をしている内に仲が良くなり、何時の間にか恋人同士の間柄となつて

いた。

洋はあまり榮えているとも言えない商店街を横切って、住宅街の方へ入って行った。その住宅が密集している中に美枝子の家がある。「ワン！ワンワンワン！」

突如、犬の吠え声が響く。その発信地の前に行くと、大きな黒いドーベルマンが家の門を破って今にも出て来そうな雰囲気で、洋に吠えかかっていた。

「ジョン…、どうしてお前はいつも俺に吠えるんだ？」

洋はいつもこの家の前を通る度にドーベルマンのジョンに吠えられるのだった。犬は人の何倍も鼻が効くと言われている。人には気付かれないが、犬が不快に感じる匂いでも出しているのだろうか。それとも洋の先祖か何かが、犬を虐待でもしていたのだろうか。彼はこの犬の前を通る度にそんなことを思った。洋的にはこういう事を考える自体は嫌ではないので、むしろジョンに感謝しているくらいだった。

ジョンの猛声から逃れ、洋は美枝子の家の前まで辿り着いた。広い庭を持つ立派な家である。門から中に入り、玄関前の呼び鈴を鳴らす。ピンポンという機械音の後、

「はい」

とインターホンから声が聞こえてきた。どうやら美枝子の母のようだ。

「あの、岡安です」

洋は若干緊張しながら名乗る。相手がこちらに親しみを持ってくれているのはわかっていても、人の親と話すのは苦手だった。

「ああ、岡安君ね。どうぞ」

「は、はい」

洋は招かれるまま乙山邸に入った。

「岡安君、いらっしやい」

玄関からドアを開けると、すぐさま美枝子の母が出迎えてくれた。

もう十年も前に夫を亡くして、女手一つで美枝子を育ててきた彼女はさすがに顔や頭髮に苦勞の跡がにじみ出ており、四十五歳という年齢の割には老けて見える。そのかわり女の優しさを強く感じさせてくれる人だった。洋は、訪問するといつも自分の息子のように世話をしてもらっていた。「ここを自分の家のように思っているのよ」なんて言われたこともある。その時は、余程信用されているのだと感じて驚いたものだ。

「ほら、美枝子！岡安君が来たわよ！」

彼女は邸内の美枝子に向かって、洋の訪問を教えて呼び掛けた。

「はい。ちよつとごめん。入っててもらって」

中から美枝子の声が聞こえてきた。まだ取り込み中の様子がかかる。

「まったくあの子だったら…。ごめんなさいね。まあ中に入って」

「はい、じゃあおじゃまします」

洋は靴を丁寧に脱いで並べると、招かれるまま家の中に入った。そして畳の部屋に落ち着くと、すぐにお茶が用意された。仏壇が部屋の奥に祀っており、そこに厳しそうな顔の男性の写真が飾られている。この人が亡くなった美枝子の父らしい。

「怖そうな顔してるでしょ？」

何時の間にか隣に座っていた美枝子の母が、夫の写真を指差して言った。

「いえ、そんなことは…」

と言ったものの、確かに「怖そう」というイメージを否定することはできなかった。写真を見た限りでは、それだけの迫力を持った顔をしている人だった。

「こんな鬼みみたいな顔をしている人だけど、本当は凄く優しくかったのよ。私と美枝子を守って死んでしまったけど、ずっと家族のことを思っていてくれたわ」

彼女は良人との思い出をしみじみと語る。

「守った…？」

洋は話に引き込まれてきて身を乗り出す。

「飲酒運転のトラックが、ちょうど歩いていたら私達三人に突っ込んできてね、主人が私と美枝子を安全圏に弾き飛ばして自分が犠牲になつたのよ…」

「そんな事があつたんですか…。全然知りませんでした。てっきりご病氣か何かかと…」

「美枝子も話していなかったのね？あの子も小学生の時は相当シヨツクを受けていたからねえ。でも良かったわ、あんな明るい子に育つてくれて…」

「ええ…」

「まあ主人が生きていたら、こうして岡安君を招いたりはできないかもしれないけど…」「は？」

「主人は本当に宝のように美枝子を可愛がっていたから、ボーイフレンドなんて連れてきたら叩き出してしまったかもしれないわ」

「ははは…」

「でもきつと最後はわかつてくれたと思うわよ。本当にいい人だったのよ。だって生まれ変わったって私きつともう一度あの人と一緒になるわ」

「生まれ変わり…」

洋は自分の得意分野が話に出てきて即座に反応した。

「あら岡安君はこういう話好きなのよね？美枝子から聞いているわよ」

「い、いやそんなことは…」

「気恥ずかしくなつて否定するも、相手は既に根っ子を掴んでいるようだ。」

「別に隠さなくたっていいじゃない。そういう事に興味があるって素敵なことよ。私だって生まれ変わりとかあるのなら信じたいし。遠慮せずにそういう話をしたっていいのよ」

「はあ…。実は、生まれ変わり、いわゆる輪廻転生ですね、そういうのって凄く興味があるんですよ」

好きな話題の披露を褒められて、段々と洋の顔が生き生きとしてきた。美枝子の母とこんなことを話すとは思ってもよらなかった。

「なあんだ、やっぱり好きなんじゃないの。だって全然顔つきが変わってきたわよ」

「僕は輪廻つてあるんじゃないかと思うんですよ。その方が人生に夢もあるし……」

と洋が持論を展開しようとした瞬間、障子戸が開いた。そして

「ちよつと洋君！またそんな話をしているの？」

軽い怒声と共に用意のできた美枝子が姿を現した。

「うわあつ。びっくりしたあ！」

虚を突かれた洋は驚いて、その場から飛びのいた。

「こら美枝子、岡安君はこういう話が好きなんだからいいじゃないの」

母が美枝子をたしなめる。

「別にそういうのが好きなのはいいんだけど、あまり人前で話されると洋君がオタクみたいに見られて嫌なのよ」

「ごめんよ。もうしないよ」

美枝子には頭が上がらない洋は、ひた謝りに謝った。

「別にいいわよ。私と二人の時だって話したっていいんだし。ただあんまり他人の前でされるとねえ……」

「かあーっ、情けない。これが現代の男女の姿なのかねえ……」

美枝子の母は二人を見て昨今の男女事情を嘆いた。

「何よっ！お母さんだってお父さんを尻に敷いていたじゃない！」

カーツときて言い返す美枝子。対する母は凶星なのか無言になった。そして

「まったくあんたってそういう強気なところは私にそっくりね」

と言つて、お手上げという仕草を見せた。洋はただ茫然と母娘の会話を眺めているしかなかった。彼の目にはそれがとても不思議な言い争いに見えた。決して憎しみ合っているのではなく、お互いの言葉に愛情のようなものすら感じるのだ。

「もういいわ。洋君、早く外行こう」

美枝子はしびれを切らして、洋の手を引つ張り外へ連れ出そうとした。

「岡安君ごめんなさいね。こんな荒っぽい娘で…」

連れ去られる洋の目に、母が軽く頭を下げているのが映った。

「いえ…。おじやました…」

洋は美枝子に手を引かれるまま玄関から外へ出た。

第2話

美枝子の家の前に立ち、改めて彼女を近くに見て、洋は自分を幸せ者だと感じた。美枝子はその容姿の美しさ、活発な性格から大学では人気があり、彼女に惚れて求愛してくる男も多かった。いわゆる整った美人顔で背も高く、出るとこは出ている見事なプロポーション。モデルと言われても大抵の人が信じてしまう程であった。洋も180cm近い身長を持ち、そこそこの顔を持っていたが、不釣り合いと言われれば否定は出来なかった。そんな美枝子が自分の彼女として傍らにいるのだ。嬉しくない筈がない。

「とりあえず飯を食べに行こうよ。俺、朝から何も食べてないんだ」
洋はまず音を立てて自分の腹を静めたかった。

「いいわよ。待たせちゃったしね。言う通りにするわ」

美枝子が素直に言に従い腕を組むと、二人は駅前の方へ歩を進めた。洋は自分の腕に彼女の腕が絡み付いているだけで少しばかりの興奮を覚えていた。付き合ってもう半年近くになるが、実は未だに肉体関係はない。彼女を大切にしたいと思っているのに加え、変にその母とまで仲良くなったりしているので踏み切れないでいること、また彼女に父がいらないことなどがその原因だった。洋としては遠慮して、慎重になってしまうのだ。

もちろんやりたくてたまらないのが男の性であるが、彼女自身の心がそういう気分になるまで待つつもりだった。でも、こうさりげなくも腕が絡んで身体が密着してくると、何とも言えぬ高揚感が溢れてくる。

そのまま二人の足がある地点に差し掛った時、怒りにも似た叫び声が響いた。美枝子は驚いて洋に寄り添う。

「またか…、この犬いつも俺に吠えるんだ。さっきも凄かった」

洋の視線は声の主、ジョンに注がれていた。ジョンは今にも噛み付かんばかりの表情で吠え続けている。

「まあ、ジョンったら悪い子ね。私には吠えたことなんかないのに……」

美枝子は今までに見たこともないジョンの剣幕に驚いているようだった。そして手懐けようと彼女が近付くと、犬は手のひらを返したように「クウーン」と鳴いておとなしくなった。

「なんだこいつは！ ひどいもんだな。男女差別かい」

洋はジョンの変わり身の速さに呆れ果てた。いつも自分に吠えるのは構わない。しかし美枝子が絡んでくるとなると話は別だった。犬ところが彼女に近付いているのが腹立たしくなってきた。その手を引く。すると

「ワンワンワンワン、ワオーン！」

まるでジョンも洋が美枝子に近付くのが腹立たしいかのように吠えを再開した。それは猛然とした抗議にも見えた。

「なんだよ。俺の彼女だぜ！」

洋は頭にきてジョンを睨みつけた。しかし犬も全く引く気配を見せない。「喉が潰れてでも吠え続けてやる」といった確固たる意志のようなものが感じられる程、吠え声が凄まじい。

「こらジョン！ やめなさい！ 近所迷惑でしょ」

美枝子がたまらずジョンを叱った。だがまるで効果なし。むしろ声の大きさが増しただけだ。

「行こう、相手にするだけ無駄だ」

洋は美枝子の手を引いて、さつさと家の前を離れた。そしてジョンの怒りの咆哮だけがいつまでも辺りに響き渡っていた。

駅まで辿り着いた二人は洋の腹掬えの為に、イタリアンレストランに入った。イタリアンと言っても格式張ったものではなく、若者でも気軽に入れるチェーン店で、二人共よく利用する場所だった。中に入り席に案内されて注文を済ますと、二人は早速話し込んだ。

「昨日はゼミに来ないもんだから心配したよ」

「ふふ、バカね。お父さんの法事だって言っていたのに……」

「いや思い出してみればそうなんだけど、もう自分の発表で夢中だ

つたんでね。美枝子が来ない理由が頭からポツカリと抜けちゃったんだな」

「そう言えば山形君来てた？」

山形とは、同級生で同じゼミに所属する男子生徒だった。

「うん、来てたな。あいつがどうかした？」

「実はこの前、山形君に電話で告白されちゃったのよね」

「えーっ！それでどうしたの？」

寝耳に水の話に洋は緊張して話の先を尋ねた。

「何心配してるのよ。ちゃんと断ったわよ。『岡安なんかとは別れて俺と付き合ってくれないか？』なんて失礼しちゃうわ！」

美枝子は話しながら当時の状況を思い出して怒っていた。そんな姿が洋にはまたたまらなく可愛らしかった。

「良かった…。安心したよ」

「私が洋君を捨てて他の男に乗り換える訳ないでしょ」

「はっ、ありがとうございます」

洋はおどけて応えながらも美枝子の本気な様子を見て安堵していた。

話をしている内に注文したパスタがやってきた。強烈な空腹感に襲われていた洋は、湯気を立てるペペロンチーノに飛び付いた。

「まあ、お腹を空かせた犬みたいね」

美枝子が浅ましい姿の洋を見て呆れたように呟く。

「んぐんぐ…、ひょうがないらる、ひのうのよるはらはにもうつれないんから…」

「ねえ、何言ってるのか全然わかんないんだけど…」

食物を口に含んだまま喋る洋の言葉は美枝子にも解読不能だった。取り合っても仕様がなかったので、彼女も食事に集中した。

「ふうーっ、食った食った」

満腹の腹をさすり、洋は満足そうな顔をしていた。横目で美枝子の方を見ると、彼女はまだパスタと格闘していた。女の子らしく丁

寧にフォークとスプーンを使って食べている。

「そんなパスタ、フォークだけでズルーツと食べちゃえばいいのに。本場イタリアじゃそんなの当たり前だって話だよ」

「別に急いで食べなくていいでしょう。私はこれでいいんだから」

美枝子は自分のスタイルを崩す気はないようだ。

「はい。すみませんね」

そうは言ったものの食事も終わり、手持ち無沙汰な洋は退屈になつてきた。

「そういえば先週の『ガキの使い』見た？」

洋はふと何かを思い付いたようで、食事に没頭する美枝子に話し掛けた。

「うん、見たわよ」

美枝子はスパゲティを口に運びながら答える。

「あれでさ、松本が『宇宙人の正体は未来人だ』って言ってたじゃん」

「うん」

「あれって俺もずっとそう思っていたんだよな。言われちゃってシヨックだったよ」

「なあんだ、また超常現象の話？」

料理は美味しい筈、なのに渋い顔の美枝子。いい加減、超常現象の話にうんざりしているのだろうか？

「いや、その…」

「クスッ、別にいいわよ。話しなさいよ。ちゃんと聞くから。ただ、よく飽きないなあって思っただけ…」

「びっくりしたあ…、こっちはまた怒られるのかと思ったよ」

「私はそんなに短気じゃないわよ。で、どうしたって？」

「ダウンタウンの松本に、宇宙人が未来から来た人間だって言われね、悔しかったよ。俺もずっとそうだと考えていたからさ」

「ふむふむ」

「未来の人類ってどんな風になるか知ってる？」

「脳が大きくて頭でつかちになって、顎が細くなるんでしょ？」

「うん。それって今まで言われている宇宙人によく似ていると思う
ない？」

「うーん。言われてみればそうかもね」

美枝子も洋の説に多少納得しているようだった。

「それにさタイムマシーンって既に現代でも考えられてはいるじゃん。人類が滅びないで進歩していけば遠い未来にいつか完成するんじゃないかと思うんだ」

「それはそうね。今できればいいのに…」

「でさ、タイムマシーンを使って過去に来る人達は、その時代の人に見つかからないようにする訳だ」

「どうして？」

「だって過去と未来の人間が接触すると未来が変わってしまう可能性があるんだよ。だから過去に来たって見学するだけなのさ。きつとタイムマシーンをわざとUFOの形状に作り上げているんじゃないかな。そうすれば宇宙人ということでごまかせるし」

「ふーん。洋君、凄いこと考えているのね。そんなこと考えてみたこともなかったわ」

美枝子は心底感心しているようだった。

「いやあ、それほどでも」

「それにしてもこういう話をしている時のあなたって本当に生き生きしているわね」

「そう？」

「もっと他の方面でそういう顔をしてくれるといいんだけどね…」
「へへへ」

洋はそう言われるとただ笑うしかなかった。やっぱり人間というもの
は自分の興味のあることに対する時、最も生き生きとしている
のではないだろうか。それが洋にとっては超常現象と美枝子だった。
この二つに関わっている時だけは『生きている』実感があつた。美

枝子やその母が洋を「生き生きしている」と言つのもその辺に起因するのではないか。

「まあいいわ。お話は以上かしら？」

「ああ」

「じゃあ私も食べ終わったことだし行きましょうか？」

見ると美枝子の皿は空っぽになっていた。全く気付かなかった自分は余程話に夢中になっていたのだろう、としみじみ思う洋だった。

レストランを出た後、二人は電車で池袋へ行き映画『マトリックス』を鑑賞した。そして共に夕食を取って、また最寄り駅に帰ってきた。洋は美枝子を家まで送ろうとしたが、
「いいわよ。まだ明るいし、またジョンに吠えられるんじゃないの？」

と彼女は丁重に送りを断ってきた。単に洋に手間を掛けさせたくないのと、ジョンの吠え声による近所迷惑が理由のようだ。

「いいの？」

「うん、大丈夫よ」

「じゃあここで」

洋が手を振ろうとした刹那、

「ん……」

美枝子が唇を寄せてきた。慌てた洋だが、すぐに彼女を抱き寄せて、唇を合わせた。美枝子が離れたことで甘い瞬間は数秒で終わった。

「今日は楽しかったわ。じゃあまたね」

手を振って美枝子は去って行った。

「ああ、お母さんにもよろしく」

手を振り返して見送る洋。その身体にはまだ美枝子の感触が残っていた。彼女の肌の感触、匂い、美しさ、どれをとってもたまらなくいいものだった。

デート後の洋はまた勉強に追われるハメになった。彼の履修している授業は生徒による発表が中心で、毎週何らかの発表が課せられた。来週は木曜日に、儀礼と儀式について考察して発表しなくてはならなかった。発表があると、いつも洋は図書館から資料をたくさん集めてきて、家に閉じこもって勉強に没頭する。この間、美枝子とは授業で顔を合わせるだけ。我慢した分、無事に木曜日に発表をこなし、教授からもなかなかの好評を得ることができた。

そして金曜日、この日の梅川ゼミには美枝子や豊田、山形も集う。毎週の最後の授業なのでこの時間を迎えると洋はいつも充足感に浸るのだった。

「おう、早いな」

誰もいない教室に一人来て座っていた洋に声が掛かった。振り向くと豊田だった。

「ああ、前の授業が早く終わったんでね」

「俺、今日発表なんだよ。恥ずかしいから寝てていいぞ」

豊田は己れの発表に自信がないのか、控えめな態度で言う。

「いや、ちゃんと聞いてやる。この間ノストラダムスの事で俺をバカにしやがったからなあ」

「お前、まだそんなこと根に持っていたのかよ？」

「当たり前だ。超常現象の恨みは大きいのだ」

洋の訳のわからぬ理屈に苦笑する豊田。その時、部屋の扉が開き、二人の人間が入室してきた。

「ねえ、いいじゃんか。今度俺と遊んでくれるだけでいいからさ」

「嫌だつて言ってるでしょ」

しつこく言い寄る男とそれを突っぱねる女。洋が視線を向けるとそれは山形が美枝子に言い寄っているのだった。

「そんなこと言わないでさあ…」

なおも美枝子にくつついていく山形に、我慢出来なくなった洋が立ちふさがった。

「おい山形、いい加減にしろ！」

「へっ、岡安う。調子に乗ってんじゃねーぞ！」

山形は美枝子を守るようにして立つ洋を挑発してきた。奴は茶色の長髪、耳と鼻にピアスを入れており、いかにも最近の若者といった風貌。身体も大きく、ケンカも強そうだ。しかし洋も後には引けず一触即発の状態。

「かかってこいよ、岡ちゃん！」

山形はなおも挑発を繰り返す。

「何いっ！」

洋の手が出掛かった時、

「やめなさいよ」

美枝子はその腕を掴んでいた。

「美枝子……」

腕を押さえられ、洋は我に返った。

「暴力はいけないわ」

「だけどこの野郎が……」

「いいじゃないの。とにかく山形君ももうやめてよ！私はあなたと遊ぶ気はないから……」

美枝子がきつぱりと言うと、

「チッ……」

と舌打ちして山形は離れた席に一人座った。

「あいつ……いつもあなのかい？」

洋が山形に聞こえないくらいの小声で尋ねる。

「いつもって訳じゃないけど、今日は特にしつこかったわ」

「また今度言い寄ってきたら俺に言いなよ」

「うん。でも喧嘩はやめてね」

美枝子は洋と山形を見比べて、心配でならないようだ。

「ああ。大丈夫だよ。あんな奴に手出しはさせないから」

洋はまだ少し高揚しており、語気を強めて言った。

話している内に梅川教授が入ってきて、授業が始まった。豊田の発表は本人が言っていたような陳腐なものではなく、かなり興味深

い内容だった。洋も寝るどころか夢中になって聞いた。いつも厳しい梅川教授も今日の授業内容には満足なようで、終始ご機嫌であった。まともに聞いてないのは山形くらいで、彼の視線が宙をさまよい時々美枝子の方に向いているのを洋は見逃さなかった。

チャイムが鳴ると同時に授業は終わった。洋は豊田と美枝子と共に教室を出て、薄暗くなつた構内を歩いた。

「何だよ、いい発表だったじゃないか」

洋が豊田の発表の出来を褒める。

「そうよ、凄く詳しく調べてあつたじゃない」

美枝子もそれに同調した。

「いやあ、それほどでも…」

豊田は口では謙遜していたが、実はかなり自信があつたようで、顔が赤くなつて照れている。

「何だよ、照れてるのか？」

洋がそれを突っ込んで軽く叩く。

「痛てて…、まあ俺のことなんか別にどうだっていいからさ、二人でゆっくり話しながら帰れよ」

言つと豊田は一人走つて前の方へ行つた。

「おい、そんなことしなくたって…、一緒に帰ろうぜ」

慌てて洋が引き止めるが、

「いいって。それじゃあな」

と言ひ残して豊田は走り去ってしまった。その場には洋と美枝子の二人が残された。

「まったく…、気なんて遣わなくていいのにな。柄でもない…」

「多分、豊田君は授業前に山形君のこともあつたから二人きりにしてくれたのよ。二人の方がその話もしやすいし…」

「そうそう山形め、本当にひどい奴だよ」

洋は言われて山形への怒りを思い出した。

「ホント困っちゃうわ。そんなに悪い人じゃないとは思っただけど

…」

「いや、あんなの、いい奴とは言えないさ」

「洋君も気を付けてね。あの人、荒っぽい感じがするから…。身体も大きいし、喧嘩とかしたら洋君なんてイチコロよ」

「そんなことはないよ。あんな奴に負けるものか」

洋は美枝子に「山形より弱い」と言われた気がして、ムキになって否定した。

「そんな勝ち負けとか言わないで。私、洋君に何かあったら困るわ。ねえ喧嘩はしないって約束して」

真剣な表情で懇願する美枝子。美しい顔の上でキツい目が訴え掛けている。

「美枝子…、わかったよ。喧嘩はしない、約束する」

洋は彼女の迫力に気圧されて約束を交わした。

二人は池袋駅から電車に乗り、互いの自宅のある同一の駅で下車した。

「洋君、明日はどうするの？」

「そうだな…、久々に日帰りで何処かへ行こうか？」

「ねえ、別に日帰りじゃなくてもいいわよ…」

「えっ？」

慌てて聞き返す洋。美枝子の言った言葉が信じられなかったのだ。

「だから、日帰りじゃなくてもいいわよ」

彼女は恥ずかしそうにもう一度繰り返す。

「本当？」

「嘘なんかついてどうするのよ？」

「いや美枝子の口からそんなこと聞くななんて思いもよらなかったから…」

「そんな、別に私だってそんなこと言いたくはないわよ。でも洋君がいつまでも言ってくれないから…」

「それは…」

洋は、今まで『泊る』という行為を言えなかった理由は口に出せ

なかった。

「わかつてる…、洋君優しいから私の家の事とかまで気を遣ってくれたのよね？」

美枝子は大体お見通しのようだった。

「かなわないな、美枝子には」

「でも、明日はいいの。いい加減に私も洋君の優しさに応えたいから…」

そう言う美枝子の目は心なしか潤んでいるようだった。

「美枝子…」

そんな彼女を見て洋は本当にいとおしいと思った。今の美枝子がこれまで一緒にいた中で一番可愛く見えた。

「本当は山形君から守ってくれた時も凄く嬉しかった…。でも豊田君もいたし、授業が始まりそうだったから…」

「何だ、そうだったのか」

洋は今日、美枝子が『泊り』を口にした理由がわかった気がした。そして嬉しくなって、人通りのある駅前ながらも彼女を抱き締めようとしたが、

「何かしらしくしているのは私らしくないわね。それで明日は何処へ行く？」

美枝子は急にしゃんとして、予定の確認を始めた。ス力された洋は心の中でがつくりしたが、気を取り直して、

「そうだな伊豆辺りはどうかな？」

と話を合わせた。

「いいわね」

「宿なんかはその場で適当に決めればいいかな？」

「そうね。いいんじゃないかしら」

「じゃあ伊豆に決定！また俺が十時頃、家まで迎えに行くよ」

「うん、待っているわ。それじゃあ明日」

全てが決まると美枝子は去って行った。一人になった洋は明日への期待に胸が高鳴るのだった。今までに美枝子の裸体を想像したこ

となど、神命に誓って一度もなかった。勿論抱きたいと思ったことはあるが、洋にとって彼女は大げさでなく神聖不可避の存在だったのだ。その美枝子がついに自ら宿泊をOKしてきたとあっては、洋の興奮は前日から溢れんばかりであった。家に戻っても他のことは手に付かず、そればかりを考える有様。おまけに興奮して夜も眠れず、結局一睡も出来ずに寝不足のまま出掛けることになってしまった。

その日の朝、眠い目を擦りながら洋は家を出た。眩しい日差しに目を開けることも出来ず、ふらふらと美枝子の家を目指して歩く。いつしか毎度の如く吠え声が響き渡り、ジョンの家の近くに来たことを知った。ここまでは、いつもと何ら変わることはない光景であった。

「うるさいなあ…、眠いんだから静かにしてくれよ」

ジョンのやかましい咆哮は、ぼーっとした頭に目覚まし時計のように鳴り響いた。我慢できなくなった洋は耳を押さえてその場を走り去ろうとした。その時、

「うわっ！」

思わず叫びを上げる洋。

「プップーッ」

「キキーッ」

というクラクションと急ブレーキの音が鳴り渡り、己れの身体は曲がり角から出てきたダンプカーに跳ね飛ばされ宙に浮いていた。

「ああ、死ぬ時に全部思い出すっていうのは本当だったんだ…」

宙に浮いた瞬間はまるで時間が止まったかのようだった。走馬灯のように人生のダイジェストが流れていくのを、考察するだけの時間があった。そして、あと何秒間宙に浮いていられるのだろうかと思う程、回想シーンは長く感じられた。

「み、美枝子…」

人生劇場のラストに美枝子の顔が一瞬脳裏に浮かんだ。そして地面が目の前に迫り、それが最後の言葉になった。洋の身体は、着地

と同時に厭な音を立てて砕け散り、周囲に血や脳漿を飛び散らした。
傍目には強烈に車にはね飛ばされて、地面に脳天を打ち付けて即
死という、あっという間の出来事だった。愛する人、乙山美枝子と
結ばれる事無く、岡安洋の人生はここに断たれた…

第3話

真っ白な空間が遙か彼方まで広がっていた。本当に何もない空間が周囲に展開されていた。頭がぼーっとするが決して眠いからではない。ここが天国、もしくは地獄なのだろうか？確かに、こんな所にずっといたくはないのであれば地獄に等しい。岡安洋は確かに死んだ。だがどういう事か、この白い空間においてまだ生きていた。

「ここは一体何処なんだ？」

超常現象に精通している洋も、さすがに自分が死んで不思議な空間に来るとまでは考えた事がなかった。死後の世界を想像したことは勿論ある。しかし、いざこうしてそれらしき所へ来てみると、知識欲を刺激されるよりは、異世界にいる不安からの狼狽の方が大きかった。とても落ち着いて物事を整理できそうにはない。どうしようもなくただ周りを見回すだけだ。

時間が経つにつれ死の実感が湧いてきて、洋は淋しさを覚えた。いくらこんな所に生きているとはいっても、現実の世界で死んだのは疑いようのない事実だ。ダンプカーに跳ねられた時の感触は確かに死を連想させた。走馬灯のように今までの生き様も見た。そして地面に頭から落ちた時、全てが失われるような感覚があった。あの時死んだのは確かである。もうおそろく今までみたいに暮らすことは出来ないのだ。一緒に伊豆へ行く筈だった美枝子の事を考えると悲しみが込み上げてくる。死んだ自分の身体を見て嘆いているのではないか？そう思うと涙が出そうに…

「そんな…」

涙を流すような美枝子との思い出から、洋はとんでもない事に気が付いた。自分の心は泣いているのに涙が流れない。涙など出る訳がなかった。何と、何処をどう見ても自分の身体が存在しないのだ。間違いなく意識はこの白い空間に存在しているのだが、岡安洋とし

ての肉体はなくなっている…。本当の超常現象が自分の身体に起こっていた。

「うわあああ！」

口はないけれど、意識上で洋は叫びを揚げた。決して夢などではない。驚愕の事実には洋はパニックを起こす寸前だった。しばらく頭は混乱して、正常な思考能力が欠如していた。そんな洋の意識に不意に女性の声が響いてきた。

「落ち着きなさい…」

「うわあっ」

予想外の事態の連続に、「落ち着け」と言われた所で平静に戻れる筈がなかった。洋はさらにパニックを起こして錯乱した。

「大丈夫、心配しないで…」

謎の声は優しくそんな声で、再度洋に落ち着くように促してくる。

それは天使の囁きと思われれば、悪魔の誘惑のようにも感じられた。

「だ、誰なんだ、あんたは？」

身体もなく口も持っていない為、洋は心の中で声を発した。ところどころが通じたようで相手は

「私が誰かなんてどうでもいいことです。あなたの運命を決める者としても言っておきましょうか」

と応えてきた。

「お、俺の運命を？」

「そうあなたの運命です。それがこれから決まるのです」

「俺の運命って、俺は死んだんじゃないのか？」

謎の声による、とんちんかん話に洋の頭は再度混乱しかかっていた。

「そう、確かにあなたは死んでいます…」

「じゃあ運命って言ったつてもう決まっちゃっているんじゃない？」

「それは違います。これから私がする質問への答え方一つで全て決まるのです」

「質問？」

「はい。とっても簡単な質問なのです。その答えであなたがこれからどうなるか決まるのです」

「そんな簡単に決まるものなの？」

洋はまだ信じられず訝しげに尋ねる。

「ふふふ、あなたは変わっていますね」

「俺が？変わっている？」

「あなたは生前、常ならぬ現象に興味を持っていたのではありませんか？それなのに今起こっている事態が現実と思えないなんておかしいじゃないですか？この世には常識で測れない現象もあるのですよ」

「言われてみれば…」

相手の言葉で洋はようやく事実を直視出来た。確かに超常現象に興味を持つ者がこの現実を認められないのは変だ。

「納得して頂けたようですね。では聞きます。あなたは生まれ変わりとこのものを信じますか？」

「は？」

洋は突然の不可解な質問にまた当惑した。

「ですからあなたは生まれ変わりを信じますか？」

声は戸惑う洋に構わず、再度同じ問いを繰り返す。

「それが質問なんですか？」

「そうです。もう一度だけ聞きますよ。あなたは生まれ変わりを信じますか？」

声に尋ねられ、洋は考えた。いや、考える迄もない…

「はい。信じます」

洋は以前から輪廻転生には興味を持っており、一週間前に美枝子の母にも言った通り、それは『ある』と信じていた。質問の趣旨はわからないものの、真摯な気持ちで答えたつもりだった。それに、もし生まれ変わるのなら、もう一度美枝子に会いたかった。

「そうですか…。信じますか。わかりました。ではもうすぐ裁定が下るでしょう。少しの間お待ち下さい」

その言葉を最後に謎の声は洋の意識から消えていった。

「待てって言われても…」

残された洋の意識はぼーっとその場に漂っしかなかった。すると突然意識が己れの意志とは関係なく振動を始めた。連続で回転を起こし、持つてはいないが脳が揺られるような感覚を覚えた。物凄いスピードで移動し、回転し、いつしか意識が遠退いていった。

気付いた時には生暖かい水の中にいた。今度は自分の身体があるのがわかる。手や足を持つている感覚があり、自分が生命として存在する実感があつた。あの声の言う通り『生まれ変わり』をしたのだろうか？

不思議なことに目が開けない。いや目だけでなく、全体的に身体機能が不自由な感じだ。首を絞められているような息苦しさも感じるし、へその辺りがむず痒くもある。身体が不自由なのは自分のせいだけではなく、どうも今いる場所の狭さも関係あるようだ。身体を無理矢理に包み込まれているようで、どうにも窮屈でならない。目が開かない為、出口も探せず、しばらく我慢するしかなさそうだった。

「ワンワンワン！」

遠くの方で犬の吠える声が聞こえたような気がする。途切れ途切れではあるが、繰り返し聞こえてくることから幻聴とは思えない。どうやら現実の世界に戻って来たことは間違いないようだ。

それにしてもここは一体何処なのだろうか？盲目の洋は全知全能を振り絞り、考えを巡らすが全く検討がつかなかった。今まで一度も経験したことのない場所のような気もするし、遙か昔にいたことがある場所のような気もした。何となく懐かしい感情も湧いてくるのは気のせいだろうか？ここにしていると窮屈なのだが、不思議と落ち着く気持ちにもなれるのだった。

もつどのくらい時間が経ったのだろう、洋は退屈さを感じていた。不思議と腹は空かなかった。常識では考えられないが、栄養分が自

然と身体に入ってくる感覚があった。何故か空腹をもよおしてこないのだ。放尿も中とするしかなくて、汚いけれどした。眠るのも自由に出来ることから、洋には退屈さだけが敵だった。とにかくいつまでも目が開かないし、この場所から出られそうにないのだ。何も出来ないのは苦痛以外の何物でもなかった。

そんな時、洋は常に美枝子の事を考えた。現実の一日という時間のリズムがどのように動いているかはわからなかったが、起きている時間のほとんどを彼女を思うことで費やした。イメージの中の美枝子は常に彼に微笑みかけていた。身体を取り戻した自分が、彼女に再び巡り会えるのか？いや必ずもう一度彼女の前に現れる！洋はそれだけを夢見て退屈と戦っていた。

だが狭い穴ぐらの生活にもついに終わりが来た。洋がここに暮らして数え上げただけで約60日、本当に退屈な日々だった。いよいよ己れの身体が明るい所へ出される時が来たのだ。

まず自分を包む水が外へ出て行く。そして出口と思われる穴から外界の空気が入ってくるのがわかった。段々と身体がその穴の方へ吸い込まれるように向かって行く。己れの体躯が頭から外に出ようとしているのが感じられた。

外は眩しかった。目の筋肉がやっと開くことを許可してくれたが、急に明るい所へ出た為、まともに開けることが出来ない。まだ身体が濡れてぬめっていて、気持ち良くも悪くもある。姿勢は寝転がった状態の筈だ。洋は子供の頃に水族館で見た寝そべるアシカの姿を思い出していた。

「ぐうっ！」

声を出そうにも変なうめきしか発せない。喉まで変になっている。自分に触れている者が数人いるようで、人の手の感覚が身体に残る。「そおーっと、そつとよ！」

そんなことを言っている声が聞こえ、洋は自分が大切に扱われているのを感じた。何処か病気にでもなっているのだろうか？それともこの前、ダンプに跳ねられた時点まで時が戻ってでもいるのだから

うか？だがその割には身体の何処にも痛みはない。

やっと目が開いた。眼前には見知らぬおばさんと医者風の若者がいて、洋の身体を見下ろしている。おばさんは洋の身体を丁寧にタオルで拭いていた。全裸姿で恥ずかしい洋は

「止めてください！」

と言うつもりが、

「ワンワン！」

と叫んでいた。啞然とする洋。

「ほら、おとなしくしなさい！」

おばさんは優しく洋をなだめている。洋は己れの身体を見回して、初めて何が起こっているのかを悟った。

「ワワワワン！」

洋は叫んだ。しかし叫ぼうにも人の言葉が出ない。何と自分の身体が子犬になつていたのだ。そして今までいたのは親犬の腹の中だった事がようやくわかった。洋は犬としてこの世に転生したのだ。この二カ月余り、ただ窮屈で暗い所に押し込められていて、何もわからなかった。

（何てこった…。生まれ変わったと思つたら犬かよ…）洋はがっかりした。この世に転生したのは事実である。しかし犬では人とも喋れないし、世界のシステムもわからない。これからどうやって生きていけば良いのだろう。そして何より美枝子と再会する夢が叶わない。自分が洋だという事を伝えようがないし、仮に伝わったところで犬と人間の恋愛など成立する訳がない。

第4話

洋は母犬と切り離され、そのまま獣医に一カ月程大切に扱われて、とある家に貰われていった。表札には『篠原』と書かれていた。どうも見覚えのある所だと思ったら、美枝子の家の近所だった。結果的には犬としてではあるが、美枝子のそばに戻って来たことにはなる。しかしとても喜べる状況ではなかった。多くの苦難が洋を待ち受けていたのだ。

初日、洋は篠原家に大歓迎を受けた。篠原家は四大家族で、家長の孝夫、妻の伸枝、そして達也（14歳）と大介（9歳）の男の子二人の構成だった。洋は早速『ブルース』なる名前を与えられた。何よりもまずその名前に慣れるのに苦労した。『岡安洋』の名前しか頭にない為、ブルースと何度呼ばれても反応出来ないのだ。最初の歓迎ムードは何処へやら、それで何度も小突かれた。特に小学校低学年の大介にはイジメにも等しいやられ方をした。何も知らない無垢な子供は、家に飼われた動物にはひどくあたるのだった。

さらにお手やお座りの強要もこたえた。しつかりやらないとまともに飯を食わせてもらえないからだ。さすがに主人の孝夫は餌を食わせてくれたが、伸枝や達也は命令を聞かないと平気で飯抜きをする有様だった。

また飯を食えたとしても、そのマズさには辟易した。犬になった以上、ドッグフードや混ぜ飯を食べることは可能なのだが、人間時代の飯と比べて味に格段の差があった。時には吐きそうにもなる始末。犬は変に鼻が効くだけに、流れて来る人間の御飯の匂いによって美味しい食事の懐かしさを何度も呼び起こされた。

そして何よりも素っ裸で外に放置され、散歩で外を歩かされるのには耐えがたいものがあつた。人に凝視されながら放尿や放糞など出来たものではない。その為、常に洋は自分の犬小屋の中で人に隠れて用便をした。するとその始末の係になる達也が

「いい加減にしるブルース！今度やったら飯抜きだからな！」

と言つて頭や尻を叩くのだった。（こつちだって、したくてしてるんじゃないや…）洋にとっては踏んだり蹴ったりの状態が続いていた。

そんな苦労の中、久しぶりの楽しいひとときが訪れた。いつものように昼間を退屈に過ごしていた洋は、門前に人影を認めた。

「こんにちは」

影から聞いたことのある声が響いた。その声を聞いて、玄関から伸枝が姿を見せる。

「あーら美枝子ちゃん。いらっしやい」

訪問者は美枝子だった。

「おばさん、子犬を飼い始めたんですって？見に来ただけどいいかしら？」

何と美枝子はブルースこと洋を見に来たのだ。洋の胸は弾んだ。

「ええ、どうぞどうぞ。構ってあげてちょうだい」

「じゃあ、おじゃましまーす」

門を開け、篠原家の庭に入つて来る美枝子。しばらく会っていないかったせいか、久しぶりの彼女は前にも増して綺麗になっているように見えた。

「わあーっ、かわいい」

美枝子は走り寄つて来て、洋の身体を抱いた。すると洋は嬉しさで悲しさの入り交じつたような複雑な気分になった。

「ブルースって言うのよ」

伸枝が名前を教える。それに反抗して

「俺は岡安洋だ！」

と何度も口に出すが、人の耳にはただ「ワンワン！」という吠え声にしか聞こえなかった。

「あら、こんなに吠えて、私のこと嫌いなのかしら…」

美枝子は洋の吠え声に自分が嫌われたと錯覚したらしい。慌てて

洋はクウーンと柔らかい調子で鳴き、甘える仕草をした。

「よしよし、かわいい子ねブルース」

美枝子もなついてくる子犬に悪い気はしないようで、頭や喉などを撫でてかわいがってくる。すると洋は今の境遇の淋しさだけが増してきた。そして洋だとは露とも知らずに愛玩する美枝子を見ていて、自然と涙が溢れてきた。

「あら、ブルースが泣いているわ。おばさん、何かあったのかしら？」

子犬の突然の涙に驚いた様子の美枝子。

「あらまあ、ホントね。こんなの初めてだわ。どうしましょう？」

「ちよつと今日はこのくらいで止めておいた方がよさそうね。子犬にも何か悩みでもあるんじゃないかしら？」

「子犬に悩み？そんなことつてあるのかしら？」

伸枝は美枝子の言葉を真に受けていない顔をする。

「いや犬にもノイローゼはあるつて言いますよ。ブルースはそうかも……」

美枝子は真顔になって、半ば訴えかけていた。

「そんなまさか……。美枝子ちゃんの考え過ぎよ」

伸枝はあまりに真剣な様子の美枝子をたしなめた。すると美枝子はハッとして

「あらやだ、私つたらまるで洋君みたい……。別にムキになる気はなかったのに……」

とつぶやいて悲しげな顔をした。まだ洋の事故を引きずっているのは間違いない。そんな彼女を見て、洋の目からは一層大粒の涙が流れ落ちた。

「また見に来ます」

そう言つて美枝子は帰つて行つた。それを淋しく見送る洋に、何も知らない伸枝は

「ブルース、あんた何泣いてんのよ！」

と痛烈な言葉を浴びせる。いたたまれなくなった洋は走って小屋に戻り、中に閉じ籠もった。今日見た美枝子の一挙手一投足がいつまでも頭に焼き付いて離れなかった。

ある日、散歩に連れて行かれた洋はもう一つの再会を果たした。その場所に来た時、姿は変わっているのに洋は身構えた。しかし予想していた猛声はなかった。再会した相手、ドーベルマンのジョンは吠える事無く、ただじつと洋の姿を見つめているだけだった。いや見つめているというよりは睨んでいると言った方が適切かもしれない。

（こいつ、姿が変わっても俺の事がわかるのか）ジョンの厳しい目付きから、洋はそんな風に邪推した。確かに犬の鼻が人の数倍優れているのは本当だった。洋も犬になってから、今まで嗅いだ事のない類の匂いまでわかるようになった。遠くからでも家族の誰が近付いて来るのかがわかるし（例えば伸枝はいかにもおばさん臭い匂いがするし、大介はまだ乳臭いような匂いがした）、美枝子の匂いなどはすぐに記憶した。従って、ジョンが洋の時から残存する匂いを感じ取っていないとは限らない。今の強い視線は、そう感じさせるだけのものがあつた。

結局ジョンが吠えることはなかった。しかし洋はこの犬に浅からぬ因縁を感じると共に今後も自分と関わり合いを持つのではないかという疑念を抱くのだった。そしてその考えは間違っていないかった。ジョンが洋に吠えるのにはちゃんと訳があつたのだ。

それが証明されたのは、ジョンに会ってから一週間経つたある日の散歩時だった。洋は達也に連れられて近所の草っ原に来ていた。相変わらず出もしない排便を促されて困っている時に、匂いを感じた。

「ジョン！」

人の耳には「ワン」としか聞こえないのだろうが、洋はそう叫んだ。すると匂いの通り、ジョンが散歩中の姿を現した。相変わらず

ドーベルマン特有のキツイ目付きをしている。名前を呼ばれたことを怒ってでもいるのだろうか？

「若造…、おめえ名は何と言う？」

近くまで来たジョンは、犬にだけわかる言葉で尋ねてきた。

「ブルース…」

すかさず答える洋。人間には吠えているようにしか聞こえていない。

「ブルース、おめえひよつとすると…」

ジョンが言い掛けた時だった。犬が吠え合って喧嘩を始めるのかと察知した達也が洋の首輪を引っ張る。同様にジョンの主人も慌てて自分の犬を引き離す。ジョンの言葉はそこで途切れて理解することが出来なかった。

「痛ててて…」

洋は食い込む首輪に抗うことが出来ず、達也に引かれて家まで連れ戻された。(一体、ジョンの奴は何を言い掛けたんだろう…) 洋は家の小屋の鎖に繋がれてからも、ずっと気になって仕方がなかった。

その夜、洋は夢を見た。昔、『犬や猫も夢を見る』と聞いたことがあるが、それは事実だった。その内容は、岡安洋としての自分が美枝子とデートしている場面から始まった。以前のように彼女と仲良く話す自分が見えた。ところがそこへジョンが登場して、自分の手から美枝子を奪って行くのだ。必死で追う洋だが、美枝子の姿はどんどん離れて行ってしまふ。次第に追う洋の身体は犬に、ブルースに変わっていき、逆におぼろげに映るジョンが成人の姿に変わって美枝子と何処かへ行ってしまうのだった。

「美枝子っ！」

と叫んで洋は目を覚ました。何となくただの夢とは思えなかった。ジョンは何か隠しているのではないか？洋は冗談でなくそんな気がしていた。今まで自分に起こった現象を考えれば、ジョンが何者であってもおかしくない。

洋はジョンとの次回の接触を待った。一抹の不安は残るが、あの超常現象に興味を持っていた頃の自分が戻ってきたようで、久しぶりに悪くない気分だった。こういう時には美枝子の来訪も、悲しい気持ちなしに素直に喜ぶことが出来た。美枝子も

「ブルースは元気な子ね」

などと言ってかわいがってくれて、洋は以前に超常現象の話をする際の表情が「生き生きしている」と言われた事を思い出していた（ジョンが何者だろうと俺が美枝子を守る）などと勝手に思い込んでいた。

洋はそれからの数日間、実に従順に篠原家の人々に仕えた。それが功を奏したのか、散歩中に放し飼いされることが多くなってきた。その状況を生かし、ある日、洋は放された瞬間にダッシュしてジョンの家まで向かった。慌てて追ってくる伸枝の姿が目についたが無視して走った。所詮犬の走りに人間が、それも主婦ごときが追い付ける訳がない。

洋はジョンの家の前まで辿り着いた。そして

「ジョン！」

と一声吠えた。すると小屋からのそりとジョンが姿を現した。どうやら昼寝をしていたらしい。

「若造…、ブルース…だったか？」

ジョンは前脚を上げて、『お座り』のような格好をしながらいつもの恐ろしい目でじっと見ている。しかし洋は臆せず尋ねる。

「ジョン、あんたこの間何を言おうとしたんだ？」

「ガキが！俺様に命令する気か？」

ジョンは眠りから起こされ、苛々してるようだ。

「べ、別に命令なんて気は…」

洋は相手の剣幕に慌てて否定した。

「ハッハッハ、冗談だ。そんなにビビるんじゃないよ。ちょっとかかっただけだ」

ジョンは怯える洋を見て笑っている。その様子を見て洋は安心し

た。

「俺もお前の事が気になっていたんだ。ちょうど良かった」

「えっ俺を…」

聞いて洋は驚いた。一体自分の何が気になるというのだろうか？次の瞬間、ジョンの口からとんでもないセリフが飛び出してきた。

第5話

「おめえひよつとして元は人間だったんじゃねえか？」

「えっ！な、何故それを…」

洋は本当にびつくりした。多少なりとも疑念を抱いていたとはいえ、まさか犬のジョンにそんなことを言われるとは思っても寄らなかったのだ。

「やっぱりな。犬にしては動きがぎこちねえと思っていたんだ」

「ジョン、あんたは一体…」

「安心しろ。俺も元は人間だった…」

ジョンの口から衝撃の告白がなされた。今まで洋に吠えていたこの犬は、自分と同じく人間から生まれ変わった生き物だったのだ。しかし驚きはそれだけではなかった。

「あんたも人間…、だったんですか？」

「ああ、近所に乙山って家があるだろう。あそこの家の恒夫って者だ」

「えーっ！」

それを聞いて洋は引つ繰り返る程の衝撃を受けた。ジョンが洋に向かつて吠える訳だ。彼は自分の娘に近づく奴に対して吠えていたのである。

「おめえは何処のどいつなんだ？」

ジョンこと乙山恒夫は急に親しみを持ったような顔つきになって、尋ねてきた。洋は迷った。本当の事を言うべきだろうか？もし自分が岡安洋だったと知れば、このドーベルマンは敵意を剥出しにしてくるのではないかとも思われた。しかし、嘘を言うのも嫌だったので、

「僕は岡安洋という者でした…」

と正直に名乗った。まるで彼女の両親に交際の許可でもお願いする気分だった。

「岡安…？あつてめえ、うちの美枝子に手を出していた野郎だな」
予想通り、ジヨンはカーツとなった。洋は自分の決断ミスを後悔したが、

「まあ死んだんじゃ仕様がねえな。元人間同士仲良くやろうや」

意外にも恒夫は怒っておらず、すぐに親しげな顔つきに戻った。

「す、すみません」

訳もわからずに洋は謝った。

「おい、美枝子はどうだった？いい奴だったろう」

「はい、僕は彼女の事がすごく好きでした。今でも…」

洋は犬になつて彼女の父親とこんなことを話している自分が不思議に思えた。恒夫はどう思っているのだろう。

「そうか、死んだ奴にまでそんな風に思ってもらえてあいつも幸せだろうよ。俺もおめえに散々吠えたが、決して悪気があつたんじやないってことはわかつてくれや」

「はい」

洋は恒夫がいかにも娘の事を心配しているのかがよくわかった。美枝子の母が「生まれ変わっても一緒にになりたい」と言うだけのことがある人だとも感じた。

「まあ、美枝子の話はおいおい聞かせてもらうとして、おめえはもつと犬らしくせにやらんぞ」

「えっ？」

「いいか、もしお前が人間から犬に転生した者だつてことが、一度も生まれ変わりをしたことの無い奴にバレると、二度と転生できなくなるんだ」

「二度と転生できないって、転生って何度も出来るんですか？」

洋は恒夫の言葉に引き込まれた。どうやら彼は転生について詳しい知識を持っているようだ。洋の知識欲が増幅される。

「む、ちよつと待て。おめえの家の奴が来たみたいだぞ」

恒夫は犬特有の嗅覚で人が迫ってくるのを察知した。

「そんな…、話のいいところだったのに…」

せつかくジヨンの所まで来て、これから大事な話になるところへ邪魔が入ってはたまらない。洋はその辺に隠れようとした。

「いや待て！」

恒夫はそう言うのと立ち上がって、家の門を蹴飛ばした。ギーッと音を立てて門は開かれた。

「ジヨンさん、門を開けてどうするんですか？」

「いいから入れ！」

言われるままに門から庭に入る洋。そして恒夫の指示を待つ。

「そしたら俺に近寄って、親密そうに鳴くんのだ」

「えーっ、男同士でそんなこと……」

洋は躊躇した。

「うるせえ、やれったらやれ！」

しかし恒夫は強要する。仕方なく洋は恒夫に擦り寄ってクウーン、クウーンと鳴いた。その内に伸枝が門前に姿を現した。

「こら、ブルース！人様の家に入って何しているの！」

伸枝の怒りも何のその。洋はとにかく恒夫の言う通りに鳴き続けた。伸枝が引き離そうとしても、決して離れようとしなかった。しびれを切らした伸枝は玄関まで行き、呼び鈴を鳴らした。

「はい」

と返事がして中から伸枝と同じくらいの年齢の主婦が登場した。

「あら、篠原さん。どうかしたの？」

どうやら二人は近所同士、顔見知りのようだ。

「佐藤さん、ごめんなさいね。うちの犬がおたくの犬にひつついて離れないのよ」

伸枝は頭を下げながら、洋と恒夫の様子を指差した。すると佐藤さんと呼ばれた女は二人の近くに寄って来て

「こらジヨン！離れなさい！」

と、しばらく悪戦苦闘していたが、必死にくつつく洋と恒夫を引きはがすことは出来なかった。

「篠原さん、こりやダメだわ。しばらく放っておきましょう。良か

「つたらし少し寄って行つたら？」

「そうね、ちよつとそのままにしておいた方がいいみたいね。うちの犬、ストレス溜まつてるのかもしれないし、ジョンが遊んでくれればちよつどいいかもね。それじゃあちよつとお邪魔してもいいかしら？」

「ええ、どうぞ」

佐藤に言われて、招かれるがままに伸枝は邸内に入って行つた。

「うまくいったな」

恒夫は策略の成功に胸を張っていた。

「ええ、さすがですね」

洋もその機転の効く様に感心していた。恒夫の策がなければ家に連れ戻されていたところだ。

「それで話に戻るが、おめえはどうやって犬つころになつたんだ？」

「死んだ後、何か真つ白な所へ行つて、不思議な声に『あなたは生まれ変わりを信じますか？』って質問されたんです」

「そうか、じゃあ俺と同じだ。間違いない。転生つてのは何度でも出来るんだよ」

「本当ですか？」

「ああ。俺はもうこれが4度目の転生だ。最初で『信じる』って答えれば、以降はルールを外さない限り、何度でも転生は出来るらしい」

それから恒夫は転生について彼の知る限りの説明を始めた。まず転生のルールとは、自分が生まれ変わりである事実を人に話さないこと（とは言つても恒夫と洋のように互いが生まれ変わりの場合はOK）・自殺をしないこと・悪業を重ねないこと。これらを守っている限りはほぼ永久に転生出来るらしい。よく不思議な現象を扱った話で「私は前世の記憶がある」などと言っている人間が出てくるが、ああいう者はルールを破っており二度と転生出来ない。

死んだ時に必ず声が聞こえてくるとは限らないらしい。声が聞こ

えなければその時点であの世行きが決定する。これは完全に運によるものらしく、千人（匹）程度に一人くらいの割合らしい。ただし一度資格を得れば繰り返しは可能。また声の正体は不明。

「まあ神様とか天使の類なんだろうな」

と恒夫は言う。洋もあの時の光景を思い出し、同じように感じていた。人外の神秘的な存在としか考えられなかった。

転生する生物は己れの意志では決められない。恒夫や洋みたいに犬になることもあれば蠅や蚊などの昆虫になることもある。その逆で、昆虫だった者が人間になる事もある。一般的に見て最高位は人間であり、これは宝くじで一等が当たるくらいの確率らしい。最低は植物であり、これになるとロクに身動きが出来ずに退屈な日々を繰り返すことになる。

地球上の全ての生物が転生しているのではない。特に人間は転生じゃない者が大半である。だから皆がこの原理を知って生きているのではない。その転生した動物の言語や身体機能は身に着く。だから洋が転生していない犬と話すことは可能。それと両性具有のミミズにでもならない限り、基本的に性別は同一となる。生まれ変わる地域も元々暮らしていた所からそう離れることはない。

「まあ俺が知っているのはこんなところかな」

恒夫は長い説明を終えて、欠伸と共に横になった。

「いやあ驚きました。生きている時から転生ってあるんじゃないかとは思ってましたが、いざこうして事実を話されるとやっぱり不思議です…」

洋は心底から転生の話に驚嘆していた。経験者の恒夫に話されると、この世の原理の複雑さを改めて思い知らされた。超常現象に興味を持っていた自分が、ついに一つの謎を体現して誇らしくもあった。

「だろう、俺も最初は訳がわからなかった。でもあの声を聞いた時、家族の姿が頭に浮かんでな。生まれ変わるものなら生まれ変わりたいと思ったんだ」

「わかります。俺も美枝子に会いたい気持ちで一杯でしたから……」

「そうだな。俺やおめえのような現世に未練があるまま死んだ者が転生できるのかもしれないな」

「ええ」

洋は恒夫の言う事がよく理解出来た。立場は違えど共に美枝子を愛する者同士、根底に流れる気持ちは一緒だった。

「ところで一つ聞きたいんですが、どうして恒夫さんは転生についていろいろと知っているんですか？」

転生の説明を受けている内に洋が感じた疑問だった。洋自身は転生の際にほとんど説明を受けていなかったから、それが気になっていた。

「あの不思議な声は死んだ時に毎回囁いてくるんだよ。その時に少し聞いたのさ。いろいろ尋ねれば少しくらい教えてくれるんだ。あとは自分と同じように転生している奴から聞いたりした。俺がおめえを転生者だとわかったように、やっぱり経験者から見ると初心者には動きがぎこちなくてすぐにわかるんだよ」

「へえーっ……。そんなもんなんですか」

洋は疑問が氷解してすっきりした。

それからしばらく二人は美枝子の事などを話し込んだ。夕日が傾いてきた頃、伸枝が玄関から姿を見せ、洋を連れて行こうとした。話も一段落して心残りもなくなった洋は、今度は素直に伸枝に従った。

「また来いよ」

恒夫が別れの挨拶を寄こす。洋はそれに応じて

「はい、是非」

と一声吠えて、佐藤家を後にした。同様に人間同士も別れの挨拶を交わしていた。夕日に背中を照らされながら洋は篠原家に帰宅した。

第6話

自分の小屋に戻って、洋は今日の恒夫の話を整理した。この世に転生している生物が多々いるのなら、今まで不思議だった事象の解明にも繋がる。例えば植物が音楽を聞かせてやると生き生きとして育つという事は、転生している者の好みの音楽ならば十分に考えられる。犬が計算できる事、迷子になっても家に戻れる事なんかも理由は明らかだ。今まで不思議に思っていた事が次々に解明されてきて、洋はわくわくしていた。

「ああ、自分は命と引き替えに一つの真理を得た！」

死んだ淋しさは拭えなかったが、洋は初めて転生しての喜びを得た。

それからの洋は変わった。散歩に行っても外で用便を済ませられるようになったし、飯のマズさや家族の命令にも慣れた。恒夫の言ったように、犬になりきる必要性を感じたのだ。なれるものならもう一度人間になりたかった。その日まで絶対に転生者だと知られてはならない。その為、洋は本気で犬の生活に馴染んだ。恒夫という理解者が出来た事も大きかった。悩みがあれば常に相談した。おかげで段々と犬として暮らす苦痛はなくなっていた。

そんなある日の事だった。洋が犬になってもう一年近くが経っていた。夕暮れ時の庭で、洋は美枝子の匂いを感じ取った。おそらく大学からの帰宅だろう。ただその美枝子の匂いの他にもう一つ別な匂いが混じっていた。今まで嗅いだことのない匂いだ。しかし何となく記憶の隅に残るような香りでもある。

「だろっ。あいつ面白いよな」

以前に聞いた事のある男の声。門前に現れた姿を見て洋は驚いた。山形だ。奴が美枝子に付きまといているのだ。

「ふふふっ」

美枝子も笑みを浮かべて山形の話に付き合っている。そのまま二人は篠原家を通り過ぎて美枝子の家の方まで行った。

「何なんだよ、一体……」

洋の目に映った二人の仲良さそうな姿。思い出すと齒軋りする程の悔しさが込み上げてきた。山形が恋人を失った美枝子にうまく取り入って、交際が始まっているのでは？そんな事を考えると洋はいてもたつてもいられなくなった。心臓の動悸が速くなり身体が熱くなる。その夜、洋は興奮して眠る事が出来なかった。

翌日、洋は佐藤家へ行った。恒夫も山形と美枝子の姿を見ているだろうと思ったのだ。

「おお、見たぞ！何かちゃらんぼらんそうな奴と歩いていたんで吠えてやった」

恒夫も昨日の二人が歩く姿を見たようで、聞いた途端にいきり立っていた。恒夫から見ても山形は外見からして気に食わないらしい。

「どんな様子でした？」

とにかく心配な洋は詳細を尋ねる。

「男の方が美枝子に擦り寄っている感じだったな。俺が吠えたとその男は門まで来て、睨みつけて行きやがった。ありゃあちよつと危ないな。美枝子の奴もあんなのと一緒に歩いてどうしちまったんだ？」

恒夫の話し振りからは怒りと当惑がうかがわれた。親として娘に山形みたいな男を近付けたくないのは洋にもよくわかった。

結局、二人の関係まではわからなかった。洋は悶々として日々を過ごすしかなかった。

三日後の夕方、洋は再び山形と美枝子の歩く姿を見た。今日はそのまま見過ごす訳にはいかないと思い、洋はこっそりと庭から柵を越えて家を出て、二人の後を尾行した。恒夫の言った通り、山形が美枝子に迫るような仕草がうかがえる。段々と二人の話し声が大き

くなつていき、5mは離れている洋の耳にも会話が聞き取れる程だった。

「なあ、いいだろ」

「嫌よ！」

美枝子が拒んでいるのが洋にもわかった。

「そんなこと言わないでさあ」

そう言つて山形は美枝子に手を延ばす。洋がそれを阻止しようと走りだした瞬間、

「いい加減にして！」

パチンという音が夕闇に響き渡った。美枝子が平手打ちを食らわせたのだ。洋は駆け寄る寸前で急停止した。そして電柱の陰から二人の様子を見守る。美枝子は一撃くらわすと、さつさと家路へ向かった。

「ちくしょう……」

どういう訳か、とり残されて恨み言をつぶやく山形の姿が気になった。洋は駅の方へとぼとぼ向かう山形を追った。奴は平手打ちされた左頬を押さえながら、苛ついた表情で歩いていた。洋は何となく危険な匂いを感じた。そしてその予感は間違つていなかった。

「あの女……今度犯してやる！」

山形がそう呟いたのを確かに洋は聞いた。さつさと歩いて行く奴を尻目に、洋は美枝子に危険が迫っている事を知り、恐れを抱くのだった。

そして家に戻った洋には、とんでもない罰が待っていた。夜になるというのに勝手に家を抜け出した事で、家長の孝夫に嚴重に首輪と紐を付けられたのだ。

（このままではいざと言う時、美枝子を守れない！）洋は必死に抵抗した。しかしその行為は火に油を注いだに過ぎず、却つて『やんちゃな子犬をしつける』という家族の意志決定をさせる結果となつてしまった。齒軋りをして悔しがる洋。しかし庭から出る事は、散歩以外困難な状況となつてしまった。

翌日早朝、洋の鼻は登校する美枝子の匂いを捕らえた。門ぎりぎりの所まで紐を引っ張って行き、必死に吠える。

「ワン！ワンワンワン！」

洋の叫びは美枝子に届いた。彼女は吠え声を聞いて門前まで来た。「どうしたのブルース。朝から吠えて？」

美枝子は吠える様子を訝しげに見ている。

（山形に気を付けるんだ！君を狙っている！）洋がそう言っているつもりでも、彼女の耳には「ワンワンワン！」という響きにしか届かない。彼女は洋のただならぬ状態を察知してはいるようだが、犬と人間ではこれがコミュニケーションの限界であった。

「ちよつと待つてね」

美枝子はそう言つて洋を制すると篠原家の呼び鈴を鳴らした。

「はい、あら美枝子ちゃん、どうしたの？」

邸内から声がして伸枝が出て来た。

「何かブルースの様子がおかしいんです。ずっと吠えてるから……」

「あら、また悪さしてこの子は！」

伸枝はしかめっ面をして洋を見下ろしていた。

「もしかして首輪に繋がれているのが嫌なんじゃないですか？」

美枝子のその言葉を聞いた時、洋は（しめた！）と思った。しかし、

「そうね。そうかもしれないけど、今はしつけの最中だからねえ。今ちゃんと教育しないときかん暴になっちゃうかもしれないのよ」

そうは問屋が卸さない、伸枝は首輪を外せない理由を述べた。

「へえ、そうなんですか。じゃあ、ちよつとの我慢よブルース」

美枝子は伸枝の言葉に納得したようで、吠える洋を諷める。それでも吠え続けるが、その警告は美枝子の耳まで届かない。もはや彼女の目は伸枝の方に向いていた。

「美枝子ちゃん、最近帰りが遅いらしいわね。お母さんが心配してたわよ」

「ええ、最近は授業が忙しくて。いつも一時間以上延長するんです

よ。それで今日もゼミの飲み会があるから、またお母さん心配しちゃうわ」

その美枝子の言葉に洋は反応した。ゼミの集まりなら間違いない。山形も来る。ということは今夜、奴が凶行に出ないとも限らない。洋は焦った。必死になつて美枝子にすがりついて叫ぶが、

「こーら、おとなしくなさい」

と言われる始末。しまいには伸枝によつて小屋まで連れ戻されてしまった。

「じゃ、行つてきます」

と言う美枝子の後ろ姿だけが洋の目に映った。暴れても庭から出ることは出来ない。そもそも伸枝の目が光っている間はどうにも出来そうになかった。

じりじりとして地団駄を踏んでいる内に昼間になった。この日は太陽が真上に昇る晴天日、ついに主婦の伸枝が家を出た。買物に行くらしい。チャンスとばかりに洋は作業を開始した。

作業、それは首輪と繋がる革の紐を噛みちぎることであつた。ガリガリと噛む歯が音を立てる。革製の紐は並大抵の努力では千切れそうにない。次第に噛んでいる歯の方がボロボロになつて痛みを伴ってきた。まだ子犬であることも悪条件になつていた。

「ぐうつうつ…」

歯茎から血が吹き出してきた。だが洋は噛み切る行為を止めない。その視線の奥には山形に襲われる美枝子の姿が映っていた。歯が崩れるくらいは、美枝子が襲われる事を考えればどうということはない。ギリギリと歯が軋む。ようやく端の方から切れ目が入ってきた。「ぐおおおお！」

根性で歯を食いしばる。苦闘三十分、ついに紐が切れた。

「待つてろ、美枝子！」

洋は庭を駆け出し、柵越えの後、往来に出た。

第7話

洋はR教大学のある池袋を目指すことにした。美枝子の自宅もあることから、まさかこの近所で山形が手を出すとは思えない。何より山形の動静を最初から見張っていた方が安全な気がした。だが池袋へ行く前に寄る所があった。

「恒夫さんっ」

洋は佐藤家の前まで来ていた。恒夫にも美枝子への脅威を報せておく必要があると感じたからだ。

「岡安か？どうした血相変えて？」

恒夫は昼寝の真最中だったらしく、まだ寝呆けた顔をしていた。のそりと起き上がった洋の方へ来る。

「美枝子が危ない」

「何いつ。美枝子がどうしたってんだ？」

恒夫も洋の顔つきを見て真剣な眼差しに変わった。すぐに洋は事情を説明した。

「あの野郎、うちの娘を襲うだと。許せねえ。おい岡安、俺も行くぜ！」

「恒夫さん！」

恒夫が付いてくることは心強かった。人間の知恵を持つ犬とはいえ、所詮は子犬。体躯の大きなドーベルマンが一緒ならこれに優る味方はなかった。繋がれていない恒夫は門を飛び越えると、洋と共に疾走した。

T電鉄の電車が猛スピードで池袋方面に向かって行くのが見えた。しかし洋と恒夫は人間ではないので、文明の利器を利用することは出来ない。二人は池袋まで道路伝いに走って行くしかなかった。距離は約10km、一時間は掛からない筈だ。ただ主要道路は道幅が狭くてダッシュが効かない。しかも突然の二匹の犬の快走に、道行

く人々は仰天した。途中、警察が出動して二人は追い回されたりもした。もしかすると保健所にも連絡が行っているかもしれない。

おかげで池袋到着は二人が思っていたよりも手間取り、もはや夕闇が迫ってきていた。二人はなるべく大通りに出ないようにして、R教大学を目指した。さすがに大きな通りに犬が二匹歩いていたら大騒ぎになる。二人は極力人通りの少ない裏道を進んで行った。そして以前馴れ親しんでいた大学キャンパスに辿り着くと、洋は恒夫を誘導して梅川ゼミの教室へと向かった。薄暗くなった大学構内はもうほとんどの授業が終了しているようで、歩いている生徒もまばらだった。

「うわっ犬だ！」

というような声を出して驚く学生もいたが、大した騒動にはならなかった。構わず二人は奥の方にある教室を目指した。しかし到着した時、教室のドアは既に閉じられていた。

「しまった、遅かった…。もう授業終わったみたいです…」

洋は走り疲れて、舌を出しながら悔しそうに喋る。

「どうする？」

恒夫も対応策がなく、地理に詳しい洋に頼る感じだ。

「うーん…、何軒かよく行く店がありますが、そこにいるかどうか…」

洋も困っていた。授業が終わる迄には辿り着くつもりだった。

しかし予想以上に池袋到着にてこずり、大学に着いた時には授業が終わっているとは…。何という犬の不便さか。人間が如何に文明を発展させて生活しているかを身を以て味わうことになった訳だ。

「仕様がねえ、目ばしい所へ行つて見よう」

恒夫の意見に洋も頷く。今二人に取れる手段はそれしか残っていないかった。

『飲み食い処 河童』この日この店で梅川ゼミの飲み会は行なわれた。ここは梅川教授の好きな焼き鳥の皮がおいしい店で、時々ゼ

ミの飲み会で使われている所だった。ここに所属する乙山美枝子もこの会に参加していた。そして洋等が危険視する山形も勿論いた。「ここ座っていいかい？」

山形は狙い済ましたように美枝子の隣に座る。美枝子も拒絶は出来ず、奴の隣席を許す事になった。

「それじゃあ乾杯！」

老年ながらも未だ酒豪の名をほしいままにする梅川教授が乾杯の音頭を取った。それに呼応してゼミ生十二名が一斉に杯を揚げ、互いのグラスを合わせる。

「乾杯！」

山形はわざとらしく美枝子のグラスに自分のグラスを合わせてきた。そっけなく一杯目を飲む美枝子。

「この間はごめんよ」

山形はいきなり先日 of 件を謝ってきた。美枝子も鬼ではない、「私こそ平手打ちなんてしてごめんなさい。痛かったでしょう」

と逆に謝り返した。それから山形はうまく最近の流行の話などを持ち出してきたので、彼女もそれに乗せられて相手になっていた。

洋と恒夫はなるべく人目に付かないように飲み屋を探し回っていた。ゼミで行きそうな店を見付けても、中に入る事が出来ないのが犬という生き物の難しいところだった。洋はとりあえず入口のドアを何度も前脚で叩き、店の者が開けた隙に中に入り込んでゼミ生がいないか搜索する手段を取った。この方法は大体うまくいき、店員に追い回されたりはしたものの、小回りと素早いフットワークを使って逃げながら探す事が出来た。しかし数件巡ったものの、未だゼミ生の姿を発見出来ないでいた。

「ここにもいませんね……」

『魚喰い』という店を出た後、洋が呟いた。

「他に心当たりはないのか？」

恒夫も心配そうな顔になってきた。彼も山形には危険な雰囲気

があると感じていた。その為、飲み会なんてことになれば娘に危険が迫る予感の外せないようだった。

「うーん…、あ、そうだ『河童』かも」

洋は『飲み食い処 河童』を思い出した。

「よし、そこ行くぞ」

恒夫も少しばかり焦り始めており、洋の出発を促すとすぐにダッシュを開始した。

飲み会は半ばに差し掛っていた。今まで美枝子と向かい合って飲んでいた山形が、突然周りの皆に声を掛けた。

「それじゃあゲームでもしようか？」

「おう、いいね」

ゼミ生の一人が答える。すると周りのみんなが乗ってきた。

「おーし、じゃあNot100いこうか」

それは1から数字を順番に言っていく、最後に100を言った者が負けというゲームだ。数字は一度に三つまで言える。

ゲームが始まった。最初の内は提案者の山形が100になるように引っ掛けられて一気飲みをさせられまくっていた。しかし、段々とゲームが進むにつれて美枝子も飲まされてきた。そしてゲームは次々に変更。ピンポンパンゲーム（ピン・ポン・パンと言いながら指差していくゲーム）や山手線ゲーム（お題に即した物を次々に言っていくゲーム）などで皆が一気飲みを繰り返した。美枝子も相当な量、飲まされて足取りが覚束なくなり始めていた。

そうしている内に解散の時が来た。酔っ払ってただのオヤジと化している梅川教授が

「はい、それじゃ解散しまーす」

と宣言すると皆は散り散りに別れて行った。美枝子は酔いが回ってまだぼーっとしている。

「おい、大丈夫かい？」

豊田が倒れそうな美枝子の身体を支えた。

「あ、豊田君、だーいじょうぶよ」

答えた彼女は明らかに酔っていた。

「俺、梅川先生の辺りにいたからよくわからないんだけど、そっちはそんなに飲んでいたのかい？」

「うん、ゲームで飲まされちゃった…」

「送ろうか？」

方向は逆だが、豊田は友人として申し出た。彼に限って下心のようなものは全くない。そんな事では死んだ友人の岡安に顔が立たない。彼はそういう性格の持ち主だった。しかし、そこへ問題の山形が登場した。

「豊田あ、別にいいよ。俺が同じ方向だから送るよ」

奴は生意気げな面で、豊田の親切を切り捨て真似をする。

「山形、お前ちゃんと美枝子ちゃんを送れよ。何かあったら岡安の代わりに俺がただじゃおかないからな」

「俺が何するってんだ、おい！」

山形は喧嘩早くて、こんな事でもういきり立っていた。

「大丈夫よ。豊田君、じゃあね」

「ああ。気を付けて」

美枝子と手を振り合つと、豊田は去って行った。

「じゃあ行こうか」

山形は千鳥足の美枝子を支えつつ、歩き始めた。

洋と恒夫が『飲み食い処 河童』に辿り着いた時にはゼミの飲み会は解散していた。洋がそれに気付いたのは帰宅しようとしている豊田の姿を認めたからだ。

「豊田…」

洋は久しぶりに友人の顔を見て懐かしさを覚えた。

「うわっ！犬だ。何でこんな所に…」

さすがに友人の豊田も、ブルースという犬としての洋の池袋出現にはたまげていた。

「久しぶりだな」

言ってもわからないだろうが、洋は一声吠えた。

「何だ何だ、こんな所で吠えて。危ない奴だな」

野良犬と関わり合いにならぬよう用心したのか、豊田は早足に去って行った。

「豊田……」

去って行く豊田の背中を見て、何となく淋しい気持ちになる。だが、語り合えない以上、長話は無用だ。洋は気を取り直して美枝子の姿を探した。

「知り合いか？」

周囲を見回しながら恒夫が聞いた。

「ええ、大学で一番の友人だった男です。ゼミも一緒に……」

「ということは美枝子もこの辺にいるんだな？」

「おそらく……。何かそれらしい匂いがしませんか？」

洋はあちこちでクンクンと嗅ぐような仕草をする。

「うむ。そういえば美恵子の匂いも微かに……」

恒夫も鼻を効かせて娘の香りを感じ取ろうとする。

「急ぎましょう。こつちだ」

二人は匂いの通じる方角へ再び駆け出した。

山形は、酔っている美枝子を引っ張ってR教大学の方まで戻って来ていた。こちらの方角は夜になると人通りがあまりない。何軒か飲み屋はあるが、外に出ている人間の絶対数が少なかった。山形はわざとそちらの方へ美枝子を連れて行っているようで、最終的には西池袋公園に足を踏み入れた。

公園は静まり返って人のいる気配はない。山形は一度辺りを見回した後、美枝子を誰もいないベンチに座らせた。

「ちよつとここは？」

酔っていても変な場所に来たことは美枝子にもわかっていて、山形には前例がある為、口調が強くなる。

「何処つて西池公園さ」

山形は悪怯れる事無く言つてのける。その目は既に狂気を帯びていた。

「山形君、あなた……」

「へっへっへ、お前が悪いんだぜ。素直に俺の誘いを受ければ、こんなことしなくてもいいのによ」

山形は厭らしい笑いを浮かべて手を伸ばしてくる。

「や、やめて！」

必死にそれを避ける美枝子。しかし酔つて鈍った運動神経では山形の猛攻をかわすことは出来ない。奴の顔に引つ掻き傷を付けるのが、せめてもの抵抗だった。

「てめえ！」

右頬から血が流れた山形は興奮して男の力で美枝子の頬を張る。

「きやつ……」

と悲鳴が揚がった。山形は勢いに乗じて力ずくで彼女を仰向けの姿勢にする。ついに美枝子の身体は組み伏せられた。

「へっへっへ」

にやりと笑つて舌舐めずりする山形が美枝子の身体を見下ろす。酔つて上気した彼女の顔からは涙が溢れている。それをも嘲笑するように山形はその涙を舌ですくった。

「いや……」

拒絶しても馬乗りになられた美枝子は逃げる事が出来ない。足をバタつかせても山形の身体は揺るぎもなかった。

「へへへ、いただきまーす」

山形は洋服の上から美枝子の豊かな胸を掴み、揉み始めた。そして強引に服を引き裂き、ブラジャーも剥ぎ取り胸をあらわにした。

「お願い……もうやめて」

悲痛な顔で訴える美枝子だが、山形が聞く筈もなかった。奴は彼女の胸にしゃぶり付く。そしてその手は段々と下半身の方に伸びていった。

「ああ洋君、助けて…」

どうにも出来ない美枝子は、この世にいない者に救いを求める言葉をついた。

「バーカ、岡安なんざもういないんだよ！」

乳房に口を寄せながら山形が残酷な言葉を浴びせる。完全に山形は調子に乗って有頂天になっていた。だが奴がショーツを剥ぎ取るうとした瞬間、

第8話

「ワンワンワンワンワンワン！」

吠え声が公園に響き、全身から湯気を発した二匹の犬が現れた。

「この野郎！」

あられもない娘の姿を見て怒りの恒夫が山形に飛び掛かる。

「うわっ！」

突然の犬の襲来に驚いた山形は慌てて飛びのく。しかし、恒夫はさすがにドーベルマンだった。よける山形の肩口に噛み付いた。

「痛え……」

右肩を押さえてうずくまる山形。そこへ恒夫はもう一度襲いかかる。今度は山形の左足に噛み付いた。だが、

「キャン……」

悲鳴を揚げて倒れたのは恒夫の方だった。見ると脇腹の辺りから血が流れ出している。洋は山形の手に光る物を見た。ナイフだった。噛み付いた代償に恒夫は刺されてしまったのだ。

「このクソ犬！」

怒りの形相の山形は、痛みにつめき暴れる恒夫に蹴りをくらわし、ふっ飛ばした。そしてまだ胸をあらわにして震えている美枝子に近付いて行く。

「ワンワンワン！」

そこに立ちはだかったのは洋だった。何があるうとも美枝子を守るつもりであった。確固たる意志を持って山形の顔を睨みつける。

「何だあこのチビ！お前なんか怖くも何ともねえぞ！」

山形は凄んで迫ってくる。ナイフを振り回し、本気で洋を殺そうとしていた。洋は小さな身体を生かし、ナイフを避けながらヒットアンドアウェイの要領で奴に噛み付く。

「んなろ！ちょこまかと！」

翻弄されて怒り増幅の山形。洋はとにかく動きで奴を圧倒して攻

撃を加えた。子犬とはいえ、本気で噛めば結構なダメージとなる。酔っていることもあり、山形は段々とふらついてきた。

「ち、ちくしょう……」

奴は思うに任せぬ状況に恨み言を吐く。洋はとどめに喉笛に噛み付く気でいた。そして奴の首が下がった瞬間に飛び掛かった。確かに噛み付いた感触はあった。だが、

「野郎…、捕まえたぞ…。ハアツ、ハア…」

息切れしながらも山形は『肉を切らせて骨を断つ』とばかりに、首筋にかじり付いた洋の小さな身体を片手で鷲掴みにしていた。

「グルルウツ！ワンワン！」

（放せ、この野郎！）とばかりに絶叫する洋だが、一度人間の手に捕らえられてしまつては、子犬の身ではどうにもならなかった。「死ね！」

山形のナイフが洋の脇腹に突き刺さる。それも一回ではなく、何度も刺してくる。洋の身体から鮮血が飛び散つて、山形の顔にまで返り血が付く程だった。返り血をくらった奴は、まさに狂人にお似合いの顔になった。

「グウツ…、キャン…」

洋は悲鳴にも似たうめき声を揚げる。血に染まった山形の顔は悪鬼のように彼を見下ろしている。

（もう駄目だ…。今の内に逃げてくれ美枝子）洋は死を覚悟した。その時だった…

「おい、何をしている！」

公園の入口付近から声が響いた。洋は気絶しそうな痛みに霞む両目で豊田と警官の姿を見た。

「何だと！」

警官の姿に驚き、慌てて逃げようとする山形。しかし警官は素早く駆け寄って来て奴の身体を捕らえた。奴のナイフも警官には通用しなかった。振り上げた瞬間に警官の手刀はナイフを叩き落として、山形を後ろ手に捕縛した。

「ぐぬぬ…」

血走った目で齒軋りする山形。しかもうなす術はなかった。

「豊田君…」

近寄って来た豊田の顔を、茫然として見つめる美枝子。胸元を隠すように両腕で覆っている。

「こんな事になっていたとはね。俺は犬が街中を歩いていたから、危険だと思って向かって行った方向へ警官を誘導しただけなんだ…。でも無事で良かった」

豊田は洋達に巡り合った後、野良犬の危険性を感じて警官に教えただけだったのだ。それが山形の凶行現場に足を運ばせる偶然を呼んだのだった。

「うん…。あ！犬は無事なの？」

助かって安堵した美枝子だが、自分の為に山形に立ち向かってくれた犬の存在を思い出すと、すぐに洋の方へ駆け寄って来た。

「ブルース！何でこんな所へ…」

美枝子はめった刺しにされたのが近所の犬だと知ると、驚きを隠せないようだった。

「み、美枝子…」

洋は薄れる意識で自分を抱き抱えて覗き込む美枝子の顔を見た。もう助からないのはわかっていた。しかし美枝子を守ることが出来、十分に満足だった。

「私が山形君に襲われるのをわかっていたの？」

通じないのはわかっていても、美枝子は洋に語り掛ける。

「ああ」

人間には「ワン」としか聞こえないのだろうが、洋は美枝子の問いに答えた。

「もしかしたら天国の岡安が助けてくれたのかもしれないよ」

脇から豊田が言う。

「そうかも…。いる筈なのに『洋君助けて』と叫んだ時にこの犬達が現れてくれたの」

美枝子も同調して、『洋の助けだった』などと思っている様子だ。それを聞き、痛みに薄

れゆく意識の中で洋は苦笑した。

（そうなんだよ。俺だったんだよ…）それを伝えられないのが何とももどかしかった。

しかし時は待つてくれず、洋の命を奪って行こうとする。

「ブルース、死んじゃダメ！」

必死に叫ぶ美枝子。その思いも届くことなく、洋は目を閉じた。

（何だか『ゴースト』って映画みたいだな…。せめてあの主人公みたいに美枝子に思いを伝えたかったなあ…）洋はそんなことを思いながら、美枝子に抱かれて息を引き取った。

中締め

皆様、どうでしたか？栗田由紀夫です。私の事を覚えてますか？冒頭、一番最初に出てきて、皆様をこの話に案内した男ですよ。この話は長かったでしょう。お疲れじゃありませんか？

この話は実話なんですよ。まあ美枝子が山形に襲われた辺りはちよつと私の想像によるフィクションが入ってますがね。まあ岡安洋君は凄絶な最後を遂げた訳ですが、この話にはもう少しばかり続きがあるんですよ。

終わりだと思った方、ごめんなさい。まだ私も登場してませんしね、このままでは終われませんよ。それにこのままじゃ洋君はあまりに不幸ではありませんか？

何、「それも人生だ」って？まあそういう考え方もありますが…。まあ、もうちよつとだけお付き合いして下さい。嫌ならいいですよ。私、お母さんの待つ家に帰りますから…。

なあんてスネてしまつてごめんなさい。ちゃんとやりますね。何、「前置きが長い！」って？ごもつともです。実は紙面の都合で…。もう真面目にやりますよ。さーて、準備はいいですか？それでは再びお話に戻りますよ。はいどーぞ！

洋が死んで話が終わったと思つた皆様（一人くらいはいるでしょう）、よくこの話を読んでませんね。洋自身、「自分はもう死んだ」って思い込んでいますけど、それは大いなる勘違いなのです。とはいえ、あの後救急車に運ばれて助かったとかそんな事じゃありませんよ。

転生のことをよく思い出して下さい。ルールを破らなければ、自分から辞めない限りは何度でも転生出来るんですよ。洋はその所を忘れていたようです。まあ無理ありません。劇的な行動の後の死でしたから。達成感から「人生を全うした」と思つてしまった

んでしょね。

で、またあの謎の声により「生まれ変わりを信じますか？」と尋ねられた洋は当然「はい」と答えたのです。やはりこのままでは終われない気持ちもあったのでしよう。

それから洋は三年間、四回生まれ変わりました。その生物としてはトンボ（寿命）に始まり、朝顔（種子になった時点で人生終了）・蚊（叩かれて死亡）と苦難を味わってきました。何度「もう辞めようか」と思った事か。しかし四回目、洋はついに宝くじで一等を当たったのです。

じゃあここからは、また今までやっていたように「ですます」を辞めた口調に戻りますね。もう少しだけお付き合い下さい。

第9話

「生まれ変わりを信じますか」と不思議な声に聞かれてもう五回目になる。洋は今回も「はい」と答えた。人生を辞めるにしては、ここ三年間の生き様は充足感に欠ける。そんなことならブルースとして美枝子を守った時点で死んだ方がマシだった。

美枝子にはあれから恋人が出来たようだ。虫や植物としてしか生きていないのでよくはわからないが、蚊になって近付いた時に結婚するという話も聞こえた。さすがにがつくりしたが、相手は誠実そうな男だったし、もう洋としてこの世には戻れないので、ある程度の諦めはついていていた（とはいってももの、美枝子の血を吸うなど未練がましい行為もしていたのだが）。

もしかするとこの世には、何度も何度も転生して、歴史の生き証人のようになっている人間もいるのかもしれない。しかし、洋はそんな風になりたいとは思わなかった。あと一回、どんな姿であれ、自分の満足のいく人生を送ることさえ出来れば、それで転生を終えるつもりでいた。

「今度は一体何になるんだろう……」

期待と不安が入り混じった気持ちの中、洋の意識は振り回され、何処かへ飛んで行った。

洋は自分が随分と大きな身体になっているのを感じた。犬になった時と同じような感覚がある。温い水に身体を包まれている感じだ。犬の時とは違い、不自由ながらも目が開くことが出来る。じーっと己れの身体を見つめる。手がある、足がある。自分のへそと何か管のような物が繋がっている。

「に、人間だ！」

洋は狂喜した。恒夫が言っていた「宝くじで一等を取る」確率の人間に転生することが出来たのだ。

「これでちゃんとした人生を送る事が出来る」

洋は喜びに浸り、誰ともわからぬ母親の腹の中で万歳をした。すると

「あら、元気に運動しているわ……」

という声が外部から聞こえる。自分の新しい母親の声だろうが、何となく懐かしい気分がした。昔もいたであろう場所（母のお腹）に戻って来たからだろうか、と洋は思った。

母親の声はそれからもよく聞こえてきた。何故かその声を聞くとほつとさせられて、早く外に出て顔を見てみたいと思った。今、自分は妊娠何カ月くらいの状態なのだろう？とりあえず顔や身体のはしつかりと形成されているのがわかる。髪の毛も産毛ではあるが生え始めているし、爪もできていて指先の方まで伸びていた。あと小便が出そうになり、我慢出来ないでその場でするという屈辱をも味わった。赤児というのはこんな汚い事をしているのかと、変に知能だけ進んでいる為に苦しい思いをしていた。

そして意識を持つてから一カ月も腹の中にいただろうか、ついに洋が外に出る時が来た。母親は陣痛が始まったようで、「はあっはあっ」と苦しそうにしているのがうかがわれた。羊水が外に流れていくのが洋にもわかる。そして通り道に沿って、自分の頭が陰門から外気にさらされたのを感じた。自分の頭が出たり引っ込んだりしているのは、まるでかつらを付けては外す行為を繰り返しているようにもあつた。

「ヒツヒツフー」

と母が呼吸法を行なっているのが聞こえる。段々と頭が固定され、動かなくなった。何か息苦しい。舌を出して、何とか呼吸する。その時、母親の性器を舐めてしまった。何だか不思議な感覚だ。

「うーん！」

母親のいきみと共に外の世界に出されて、洋は仰天した。何と母親は美枝子だったのだ！（俺は美枝子の息子になったのか）と知ると何とも言えない不思議な気分になった。嬉

しいような、悲しいような…。

「いらつしゃい。私の赤ちゃん…」

しかし自分を産み出して満足そうな顔をしている美枝子の顔を見た時、洋は「これで良かったんだ」と納得した。

それから美枝子を母としての洋の新しい生活が始まった。やはりいろいろな違和感は生じた。自分と結ばれなかった元彼女の乳房を吸っている事、親として彼女が自分のしつけをする事、彼女が夫と楽しげにしている事などは、当初はどうしても普通の事とは考えられなかった。美枝子の息子として生きる決心はしたが、何とも奇妙であった。

犬のジョンとしてまだ生きている恒夫がこれを知ったらどう思うだろう。洋は「今度は絶対に言えないな」と思った。

一カ月が経った。生後当初の当惑は徐々に薄れてきていた。現況を直視することで、赤ん坊に成り切る事が出来るようになってきたのだ。美枝子も恋人と母の違いはあるが、愛情を注いでくれて何の不満もなかった。彼女の良人である父も優しく接してくれ、何の遠慮もなく依存することが出来た。

「俺はこれからこの両親の元で違う人生を歩んで行くんだ！」

決意は固まった。こうして洋の新しい人生が展開されようとしていた。

エピローグ

さて、皆様如何でしたか？栗田由紀夫です。洋君、とりあえず良かったですね。愛情の形は違えど、好きな美枝子の元に人間として戻れましたから。

これでこの話は終わりとなります。というのはこの後、洋は普通に人間として転生の片鱗を見せる事無く生きていくからです。そりゃ、何か起こる度に「あの時はこうだったなあ」なんて犬や昆虫の時代を思い出すこともあったでしょうがね。勿論、今まで転生してきて複雑な考えを形成した状態の人間を描くことも選択肢の一つではあります、それはまた別の機会とさせて頂きます。あしからず…。

おっと、大事な事を忘れていました。「お前が話に出てきていないじゃないか？」その質問はごもつともです。ただですね、今だから言いますが、私は最初からずーっとこの話に出ていたのです。転生という仕組みをバラして、もう二度と生まれ変われなくても、この話を皆様に伝えたかったのです。いや、皆様にといいよりは美枝子にそれを伝えたかったのです。ある程度成長した時に、将来作家になって絶対にこの話を書くことと決めていました。エゴ言えばそうなるのかもしれませんが、やっぱり美枝子に全てを知って欲しかったんです。その為に皆様にまでこのような話をお聞かせして、大変手前勝手だとは思いますが。でも、将来皆様が転生する機会があれば、何らかの参考にはなるのではないのでしょうか？不遜ながらも自分ではそう納得しております。

という事で栗田由紀夫43歳、病床の母にこの本を捧げます。ここまでお付き合い頂きありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3997e/>

素晴らしきかな人生

2010年10月8日15時49分発行